

手が動くなら、何度でも殺してみせる

二刀流に憧れた中二病

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

時に、それはVRMMORPG、sword art online、通称SAOに一人のプレイヤーが居た。そのプレイヤーの名前はシキ。彼は最前線とは言わず、中堅のプレイヤーである。

そんな彼にある日、一つのスキルが発現したのだが……

【注】これは主人公のチート？系の話です。チートがあまり好きではない方は読まれないほうが良いと思います。

## 目次

プロローグ	1
ボスを殺してみせる	4
【SAO終了】生きているのなら、何でも殺してみせる	8
【ALO開始】殺せないものは無い	16

## プロローグ

主人公 side

俺の名前は安堂四季。これは現実の名前だ。だが、今俺が”居る”このゲーム内ではシキだ。

さて、このゲーム内とは何なのか言っておこう。ゲーム、とは、通称SAOと呼ばれるVRMMORPGゲーム、sword art onlineの事である。このゲームは、ナーヴギアと呼ばれる完全なる《仮想現実》を実現した一つのデバイスによってプレイ出来る。これを作ったのは大手電子機器メーカーであり、このナーヴギアの最も重要な点は、完全に仮想世界にダイブ出来る、ということである。どういう事かと言うと、五感を全て遮断、脳の命令信号も完全に断ち切り、意識のみを仮想世界に移動させるという事である。そして、このデバイス用に発売されたのが先程言ったSAOである。このSAOを作ったのは茅場晶彦という人物で、ゲームの取材の時のコメントではこう語ったという。

『これは、ゲームであつても遊びではない。』

まあ、その言葉通りだったからこそ、今俺はこのゲーム内に居る訳なんだが……

じゃあ、そろそろ本題に入ろうと思う。俺はこのゲーム内において中堅プレイヤーと呼ばれる者である。レベルは58。ステはAGI全振りである。他は余り上がってないけど、速さで敵を倒している。さて、こんな俺だが、第57層で経験値集めをしてたんだが、休憩中にふとスキル欄を覗いてみたんだ。そしたら……

《スキル：隠蔽、索敵、クリティカル率アップ、直死の魔眼》

What? 直死の魔眼ってマジなんだよ、あれじゃん。某有名アニメの主人公の魔眼じゃん。それがなんでスキルにあんだよ。なんだ？ 茅場晶彦はオタクだったのか？ マニアックだったの？

さて、問題は気になるスキル効果だが……

《スキル：直死の魔眼

効果：自分の視界に入った全てのプレイヤー・オブジェ

クト・NPC

・友好MOB・敵性MOBの死の線と点が可視化する。この線と

点を攻撃する事により、対象を一撃で倒せる。》

ガチじゃん。何これ、控え目に言ってもチートじゃん。これ絶対エキストラスキルだよ。これ今発見されてる《二刀流》とか《神聖剣》より余っ程強いじゃん。

はあ……なぜ茅場晶彦はこんなスキル(チート)を作り俺に渡したんだ……意味分からん。

まあ、これ最前線行けってことだろ？しょうが無い、だるいけど取り敢えず今の最前線のレベルの平均85レベル位にはならないとな……そんでもってAGIに全振りしないとなあ……ん？てかなんかまだ書いてあるぞ？

《効果II・魔眼使用中AGIに大きなステータス補正、なお使用後は頭痛というデバフ効果。》

なんだよ、運営は俺に何求めてんだよ。ああもういいよ！やればいんでしょやれば！

——後日談、プレイヤーの間でとあるプレイヤーが有名となった。その名はシキ。またの名を、《直死の魔眼》。

おまけ

キリトside

俺の名前はキリト。このSAOで最前線で戦っている。今は恋人のアスタと休養中なんだが、最近こんな噂を聞くようになった。

——一撃でなぞるかのかの様に敵を葬るプレイヤー現る。プレイヤー名はシキ。二つ名は《直死の魔眼》

俺はこれを最初聞いた瞬間思いつ切り飲んでいたコーヒを吹き出した。当然アスタに心配されたが……

そりや驚くだろう。二つ名が《直死の魔眼》、そして一撃でなぞるかのかの様に敵を葬る、これの何処が違うんだ、元のやつと。

それを聞いて俺はそんな奴がいるのか……と思いつつ、何時か最前線に立つだろう、と思っていたのだった……

## ボスを殺してみせる

シキside

俺があ頭の可笑しいスキルを手にしてから早一週間。この間俺は我武者羅に敵を葬りきってきた。お陰でレベルは今や58から70まで上がった。それで、今回は最近発見されたボスを「殺そう」と思う。階層は59だ。

く移動中く

さて、もう扉の前だ。ボスを一人で倒せる位の実力が無いと前線組に認めてもらえないと思う。(↑頭おかしいヤツ)  
じゃあ、始めますか。

扉を開ける。そして、同時に聞こえてきたのは  
「グルアアアアアアアア!!!」

ボスである竜の雄叫びであった  
ボスのHPバーは四本。まあ、そりやそうだ。

「まあ、攻略組行かないと行けないし…… やらないと、駄目だよな。  
だったら……」

刹那、竜は死を予感した。

「殺そないとな!」

俺は何時も敵を殺る時の様に地を駆け、竜のブレス攻撃を避けていく。

ああ、気持ち悪い。

頭痛に文句を垂れながら、俺の目から見れば鈍い竜の攻撃を避けつつ、奴の死点に向けて走る。奴には分からないだろうが、俺は目のせいでそれが見える。

次の瞬間、俺は大幅な跳躍をする。

そして、そのまま竜の頭に向かっていき、ナイフを逆持ちにして、落ちていく。

奴の死点は頭だ。ここを突けば、終わる。

そして、奴の頭にナイフが刺さり、一瞬にして竜はポリゴンと化し、散っていった。

「どうやら倒したらしい。まあ、これ位出来ないとな。この目があるんだし。」

「おっと、どうやらレベルが上がったらしい。一気に5だそうだ。長々しい経験値のボスだ。ボスつてのはこんな感じなのか？」

「で、俺はまたもや新たなスキルを得てしまった。」

『スキル：アサシン』

効果：AGIの成長促進、戦闘中のステータス補正』

「おいおい、完全に俺？さんじゃないか。名前は同じだけど……あれ？そう言えば俺の容姿ってよく見たら……」

「いやいや、そんな筈が無い。信じたくないので心の中に留めておくとしよう。」

（帰投中）

さて、俺のプライベートハウスに帰ってきたなあ……ふむ、次のボス戦は参加、もとい直ぐ終わらせようかな？そうしよう。そしたら攻略が楽になるだろうし、俺も晴れて攻略組だ。よし、じゃあ明日から更にレベル上げだぜ！

キリトside

俺はキリト。攻略組（ry

さて、俺は今日ものんびりボス戦までアスナと休んでたんだが……俺は驚く記事を見てしまった。

『「直死の魔眼」、単独でボス討伐。様子は伺えなかったが、恐らく一撃で葬ったのであろう。』

「ブフウウウ!!」

「思いつきり吹いた。」

「大丈夫!?キリトくん!?!」

「あ、ああ、大丈夫だよアスナ。それより、この記事知ってるか？」



俺がそう聞くと

「当たり前じゃない、それもう全プレイヤーの中で有名よ？ 幾ら昨日情報が出たって言っても、前から有名だから。」

「え、お前前からこいつのこと知ってるの？」

「そりゃ知らない訳ないでしょ。一撃でなぞる様に敵を倒すつてどういう事よ、ほんと。」

へえー、アスナは知ってたのか…… あれ、もしかしなくても俺つて結構情報が遅れてんの？ う、嘘だと思いたい……

そんな事を思いながら、またのんびりし始めるのだった……

シキside

俺がボスを倒してから1ヶ月。その間俺はレベリングをやりまくり、レベルはどうとう89へと到達していた。成長スピードが可笑しいって？ そんなの、一撃で殺せるんだからな。そりゃ上がるだろ。だって、もう多分この1ヶ月で500は下らない位に敵mob殺りまくったぞ？

さて、情報によると今日はボス戦らしい。それと連続で。階層を一気に進んで、大幅な攻略をするらしい。なので、そこに行こうと思う。じゃ、行ってみますか。

く移動中く

よし、着いたぞ。じゃあ、あのヒースクリフさん？ に話しかけてみよう。

「あのー、すみません。」

「「「「「!?」「」「」」」」」」

おや、何故か俺の方に皆顔向けてる。何でだ？ まあ、いいや。

「ご、ごほん。どうしたのかね。」

「えっと、今回の大規模攻略作戦に参加させてほしんですけど……」

『なんだって!?!』

え、なんで全員声出すの？ 分かんないなあ。

「も、勿論だとも。ぜ、是非参加してくれたまえ。そして、攻略の助けになつてくれ。」

「はい。」

ヒースクリフside

それは突然だった。私がギルドの部下と話していると、それは急に起こった。

「あのー、すみません。」

「「「「!?」」」」」

その時は私と言えどゾツとしたよ。気配すら感じずいつ間にか後ろに居たんだからな。

「ご、ごほん。どうしたのかね。」

私は何をしに彼が来たのか問うてみた。

「えっと、今回の大規模攻略作戦に参加させてほしんですけど……」

『なんだって!?!』

なんと!?!あの彼が参加するのか!?!そ、それならば攻略は進むが、私の身が……。ま、まあ麻痺でどうにかなるだろう。

「も、勿論だとも。ぜ、是非参加してくれたまえ。そして、攻略の助けになつてくれ。」

「はい。」

こんなに殺気を出しそうになったのは初めてだ。やはり、あのスキルを作ったのは間違いだったのか……

シキside

何やかんやあって、俺達の大規模攻略作戦が開始した。

【SAO終了】生きているのなら、何でも殺してみせる

シキside

大規模攻略作戦開始時に転移し、俺達は第75層のボス部屋の前に居た。

「諸君、では行くぞ。」

ヒースクリフがボス部屋の扉を開く。

ゴゴゴゴゴ

中に入り、ボスの姿を確認しようとする。だが、ボスの姿が何処にも見当たらない。

「上よー！」

アスナさんがそう言った瞬間皆を見上げ、ボスの紅い目を見ている。

そのボスの体は、およそ全長100mはあるのではないかと推測するが、兎に角大きい。

「総員！シキ君がボスへと到達する為の道を作り、守るのだ！」

『オオオオオオオオ！』

俺は素早く奴の死線を見つける。奴の体中に刻まれている。一番早く片付けられる線を見つけ、そこに向かう。

「さて、仕事の時間だ！」

俺は只ひたすらに駆けていく。ミスは許されない。いや、「しないー！」

味方が道を開けてくれている。そして、足止めを。これなら、俺は奴を”殺せる”。

———そこから一気に加速していく

先ずは……一本目ッ！

なぞる

二本目ッ！

なぞる

そして、これが三本目！終わりだあああああ！

「フンッ！」

チャキンツ

そして、奴はHPバーが一気に消え、ポリゴンと化し散った。

「よしー!」

『オオオオオオオオオオオ!!』

全員が歓喜の声を上げる。さて、一休みするか……

「ふう……」

「ご苦労だったシキ君。君のお陰で死者が出ずに済んだ。」

「気にしないで下さい。俺に出来るのなんて殺す事だけなんで。」

俺は一つ質問をする事にした。

「ヒースクリフさん。少しいいですか?」

「どうしたのかね。シキ君。」

「ちよつと、お聞きしたいんですが……なんで貴方は何時もボス戦でも何でもHPがイエローにいかないんですか?」

「ツ!」

釣れた。よし、後は

「ハアツ!」

黒い剣士の人が突然ヒースクリフさんに斬り掛かる。すると……

何かに阻まれる。そして、ヒースクリフさんに表示されたのは

[immortal object]

不死存在、破壊不能オブジェクト。

やっぱり、どうにも線と点が見えにくい訳だ。最もなんでまだ少し見えるのかは俺のスキルに秘密があるんだが……

「ヒースクリフ、いや、茅場晶彦。これはどういう事だ?」

「因みに、何時から気付いていたのかね?」

「前のお前とのデュエルの時からだ。前から怪しいとは思ってたが、確証が無かった。」

「では、何故そうだと確信したのかね?」

「明らかに最後の動きが速すぎる。それが不自然だったからだ。」

「全く、感がいいと言うのも考えものだ……そうだ。私こそが茅場晶彦だ。だがキリトくん。君は少し勘違いをしている。」

「どういう事だ?」

「私は茅場晶彦であってそうではない。私は茅場晶彦がこの仮想空間上に残したら残像思念体でしかない。」

「そうだったのか…」

「そして、私は本来最上階で待ち受ける筈だったこのソードアート・オンラインのボスでもある。」

つまり、あいつの意識は既に仮想空間上にしか居ない、そして、奴は今まで俺達を観察する為に状態プレイヤーに紛れたんだ。

「さて、それで君はどうしたいのかね？キリト君。」

「俺とここでデュエルで勝負しろ。初撃決着モードでだ。」

すると、急に体が動かなくなる。

「邪魔が入らない様に麻痺を掛けさせてもらった。いいかね？」

「……分かった。」

「キ……リト……君……！だめ……！」

「やめ……ろ！……キリの字！」

俺は何でも殺せる、とは言っても今は状態等は殺せないようだ。くそつ、動けたら、ヒースクリフを直ぐに倒せるのに……犠牲を出さずに済むのに……

「それでは、始めよう。キリトくん。」

「ああ。」

その言葉を合図に、カウントが始まる。

10

9

奴が、不死を解除するのが見える。

8

7

「ヒースクリフ、悪いが一つだけ頼んでいいか？」

「何かね？」

6

5

4

「俺がここで死んでも、アスナが自殺しないようにしてくれないか？」

「ダメだよ！キリトくんッ！」

「良からう。彼女はセルムブルグから出れないようにしておこう。」  
「助かる。」

0  
1  
2  
3

「殺すッ！」

キリトさんがヒースクリフを斬る為に全力で疾走する。

「ハアアアアア！」

「フンッ！」

ヒースクリフはソードスキルを作った本人な為に、動きが全て見切られてしまう。だからキリトさんは自分の剣技だけでやろうとしている。

「セイツッ！ハアア！」

「……」

ひたすらに剣が弾かれる音が鳴り響く。不味い。キリトさんのスタミナが……

いや、きつとやってくれる筈だ。今は祈るしかない。

「クソッ！ハアアアアア！」

とうとうキリトさんがソードスキルを発動させる。システムの動きに更に自分の力で加速を付け、速度を上げていくッ。

「ダアアアアア！」

「フンッ、フンッ」

だが所詮はシステムの動き、ヒースクリフに防がれてしまう。

「ハア！」

最後の一撃が終わる。

「隙が出来てしまったな？キリトくん。」

「ッ!？」

「フンッ！」

キリトさんが剣で防ぐも、結晶のような剣は先端が無惨にも折れて

しまった。

「あ……………」

「では、さらばだキリトくん。」

「くっ—」

次の瞬間、キリトさんに剣が突き刺さると思っていたが、それは突然の事だった。

「あ、アスナ!？」

そう、アスナさんが飛び出したのである。あの麻痺を抜け出すのに相当苦労しただろう。だが、それ程までにキリトさんへの愛があったという事だろうか……

「な、なんで」

「体が、動いちゃって……………キリトくんには、死んでほしく、なかったの……………」

「お前が死んだら意味がない!」

「大好きだよ、キリトくん……………生きてね……………」

そう言い残し、彼女はポリゴンと化し、

—— パリンツ

散った。

残されたのは、彼女の愛剣のみだった。

「……………」

その剣を、キリトさんは無くなった左手の剣の代わりにしていた。  
「……………」

全く覇気のない動きでヒースクリフに斬り掛かる。

「……………彼女が命をもって守ったものも……………これで終わりだ……………」

そうして、ヒースクリフはキリトさんに剣を突き立てる。

「……………だ」

キリトさんが消える寸前の筈なのに何かしようとしている。

「まだだあー！うわああああー!」

「……………」

ヒースクリフは一瞬驚いた表情をした後、また無表情に戻り、甘んじてキリトさんの一撃を貰っていた。

「見事だ…… キリトくん。」

そして、奴が消える。

「これで…… いいんだよな、アスナ？」

剣を眺めながら、そう言う。

そして、キリトさんも散っていった。

アナウンスが流れる。

『現時刻をもって、本ゲーム、ソードアート・オンラインのクリアを確認しました。これより、生存プレイヤー全員のログアウトを開始します。』

その音が流れても、喜ぶことは…… 出来なかった。

「キリの字…… 何で死んじゃうんだよ！俺達ダチだろーが！」

「キリト…… お前ってやつは…… 畜生……」

キリトさんの知人だと思われる二人が深く悲しんでいる。

俺は関わりこそ無かったものの、彼の勇姿は沢山聞いていた。だからこそ、悲しくなってしまう。

俺達がそう悲しんでいる内に、ログアウト処理が始まった。

キリト side

俺は奴を倒した。ボスを、倒した。

「これで…… いいんだよな、アスナ？」

そう言うのと、僅かに彼女の愛剣の宝石部分が輝いた気がする。

そして、俺の体はポリゴンと化し、散った。

俺は何故か、また目を開けられていた。

「ここは……」

夕焼けが見え、アインクラッドが見える。

「キリトくん……？」

後ろを振り返ると、そこには俺の愛した彼女が居た。

「アスナ……？生きて、るのか？」

「うん。私は生きてるよ。」

「良かった……！」



思わず抱きしめる。

「長々に絶景だな。」

俺達が抱き合っていると、突然声が聞こえてきた。声の方を見ると、そいつは居た。

「茅場晶彦……」

取り敢えず、俺はこいつに質問してみた。

「茅場、何でこんな事をしたんだ？」

「……子供の頃に夢を見た。その夢には、とてつもなく大きい黒い浮遊城が出てきていた。私は、子供の頃に夢で見たそれを実現しなかったのだ。」

「それだけの理由で……」

「さて、あれを見てくれ。アインクラッドだ。あれは時期に崩れる。今頃アーガス本部にてゲームデータ等全てのデータの削除処理が行われている。」

「あの中に居た人達はどうしたんだ？」

「しつかり、生存プレイヤー全員ログアウトを完了させたよ。」

「そうか……」

「ここももうすぐ消える。最後に現実に戻る前にアスナくんに話をしておいてはどうだね？ 私はもう行くからね。」

「ああ、分かった。」

そう言うと、あいつは歩いていき、消えていった。

「じゃ、じゃあ改めて。」

「結城明日奈です。歳は17歳です。」

「桐々谷和人です。歳は、多分先月で16。」

「年下だったんだね……」

「俺も今初めて知ったよ……」

「じゃあ、そろそろお別れだね……」

「アスナ……」

「愛しています。」

「ああ……」

最後に二人で抱き合い、そして、唇を触れさせる。

気付くと、俺は久しぶりの感覚を感じる。これはもう現実に戻った証拠だ。

だが、そんな事よりも、俺は早く、彼女のもとへ行かないと……  
「あ……………す……………な」

よろめきながら立ち上がり、自分の部屋を出ていく。今気付くと、髪のももかなり伸びている。

さて、早く、向かわないと

「あす……………な……………」

そう言いながら、俺はただ歩く……………

シキside

俺は目覚め、感覚が戻るのを感じていた。どうにも仮想世界に慣れすぎて、新鮮に感じる。さて、そこはどうでもいいんだが……

俺は、とてつもなくやばい事を理解してしまっている。

俺の目には、この部屋中のモノに、赤い線と点が見えている。

「な……………んで……………まがん……………うつつてんだよ……………」

まだ感覚に慣れていないせいで、オンオフが出来ない。はあ、全く。

茅場晶彦は飛んだ置き土産をしてくれたな。

お陰で吐き気がする。

まあ、この目があっても俺は俺だ。取り敢えず今は、現実に戻った事を素直に喜んでおこう。

## 【ALO開始】 殺せないものは無い

### 四季 side

あのSAOの事件から約二カ月がたった。俺は、現実に戻ってから  
は目の調整？と言うか、慣れる為に色々やっていた。そんな事をして  
いる内に、俺の所にとある人が訪れてきた。

ピンポーン

「ん？誰だろう。」

俺は玄関からチャイムが鳴ったので、行く事にした。

「はい、どなたですか……って、え？」

「直接会った事は無かったな、俺は桐々谷和人。SAOでは、キリト  
だった奴だ。」

「な、なんで内に来たんですか？」

「いや、実はな……」

話の内容はこうだ。

・ 帰還して、アスナさんに会いに行っただけど戻ってない。死んでい  
る訳では無いらしい。

・ パソコンにエギルという人物、キリトさんの友人から一つの写真  
が送られてきた。それがアスナさんに酷似していた。

・ エギルさんの所に行っただ確認するとALOというゲームのスク  
ショ写真らしい。これはナーヴギアでも出来るそうなのでALOに  
行く事にした。

・ 出来れば、一緒に手伝って欲しい。

との事だ。俺の答えは性格上noと言えない…… 人助けはしたい  
からな

「いいですよ、手伝います。」

「ありがとうございます！後、敬語じゃなくていいぞ？お前今何歳だ？」

「16です。」

「お、同じ年じゃないか。だったら尚更敬語じゃなくていいぞ。」

「分かった。えと、和人？でいいか。ちよつと見せたいものがある。」

「ん？良いけど」

俺は直死の魔眼を見せるために裏庭に連れていった。

「俺がゲーム内で一撃で敵を殺つてたのは知ってるな?」

「ああ、それで二つ名が【直死の魔眼】だろ。」

「そんな恥ずかしい名前になってたのか…… まあ、実際スキル名がそんなんだけど。でだ、俺は現実に帰つてすぐ有り得ない事に気付いてしまった。」

「有り得ない事?」

「見てろ。」

俺は目を切り替えて、適当な木をなぞる様に切つてみせた。

「え!?お前、それ!」

「何故か、俺の現実に影響してたんだ。お陰で吐き気が凄くしてたよ。当分。」

「大変だったな…… それつてやっぱあの目と一緒になんだよな?」

「だな、てか、俺ゲームで名前シキにしてたけど、実際リアルネームも四季なんだよな。」

「すげー偶然だな…… 容姿もまんまだし……」

「あ、因みに俺女だかな。」

「は?」

まあ、そりゃ驚くわな。喋り方男だし、パツと見女だつて分かんないよな。

「ええええええええ!」

「ま、そんな訳でよろしく頼むぞ、和人?」

「お、おう。」

取り敢えず俺達は午後17時頃にログインする事にした。あ、因みにパツケージは和人がくれたよ。

和人 side

俺は四季に直死の魔眼を見せてもらつて、衝撃の事実をその後知つた。

「あ、因みに俺女だかな。」

は?

「は?」

「ええええええええ!」

嘘だろ!?全然気付かなかったぞ!?

「ま、そんな訳でよろしく頼むぞ、和人?」

「お、おう。」

女とか、まじか。

まあ、そんな事を思いながら、俺達は午後17時頃にログインする事にした。因みにパツケージは渡した。